

ハロルド・ピンターにおける愛の形

—— 理性の恋人・本能の愛人 ——

山下 雄 治

序論

愛とは矛盾の産物である。中でも、「恋人」と「愛人」の共存は永遠の矛盾である。愛の形は100人いれば100通りあって、常に変化していくものである。時に、その愛は真実でさえ歪ませてしまう。そういった人間が持つ矛盾を巧妙に、且つ奇妙に表現している人物がいる。それが、現代イギリス劇作家、ハロルド・ピンター (Harold Pinter, 1930-) である。彼の作品は他の追従を許さない独特な世界を生み出している。「ピンタレスク」と評される彼の、「不条理」、「立場の逆転」、「所有をめぐる闘い」など、恐怖の本質が露にかかった表現は有名である。彼の作品は、個々で完全に独立していて、そのひとつひとつは、ピンターのものでもなければ、私たちのものでもない。誰にも所有権のないものなのである。

ピンターの作品の中で、今回メインとして取り上げるのは、『恋人』(The Lover, 1962年) である。愛というものは、人間の本質であり、その形、中身が、美しくあれ、醜くあれ、それらを肯定したり、否定したりする権利は誰のものでもないのである。そんな不定形なものを、屈折した視点から描いているのがこの『恋人』であ

る。愛とは、安心を与えてくれるものであると同時に、とても不安定なものである。恋人と愛人。どちらも愛は愛ではあるが、性質が異なる。二つの共存。この二つの共存が不安定なものを安定に導く。その矛盾が、「ピンタレスク」によってさらに複雑になり、真実の崩壊が起こり、虚無の世界が広がり、残るのは漠然とした恐怖と、未完成のパズルのような後味の悪さである。偶然にも、この論を手がけた年と重なって、2005年度ノーベル文学賞を受賞したピンターが描いた『恋人』の真意を探るとともに、矛盾した人間愛を論じていく。

第一章 『恋人』が引き起こす矛盾の連鎖

ハロルド・ピンターの『恋人』(*The Lover*, 1962年)は、実に不可思議な作品である。様々な矛盾・疑問・謎が溢れ出し、ストーリーを歪ませ、真実がその歪みの中に隠されていき、作中の世界が複雑になっていくのである。もちろん、それらがこの作品の特徴であり、持ち味であるのだが、それらの真意を理解することは容易ではない。『恋人』の矛盾点を解き明かし、この作品が持つ答えとその真意に辿り着こう。

ここで、二つの解釈があると提案する。世間一般の『恋人』の解釈としては、リチャードとセアラは、夫婦生活を営みながらも、お互いがお互いの愛人を演じる「愛人ゲーム」をすることによって、夫婦生活のマンネリ化を防ぎ、刺激を与えようとしている、というものである。しかし、本来の意味は、本当にお互いに愛人がいて、リチャードとマックスは同一人物ではなく、セアラにとっての「夫」と「愛人」として独立しているのではないか。是非、後者の解釈で読んでいただきたい。もちろん、この解釈でも矛盾は生まれてはく

るが、「もしも…」という曖昧さが、それ以上にリアルな人間の性を読み取れるのである。

ピンター劇というものは、決まった答えが存在しない。ある批評家からは、「つまらない」とも言われている。その時点で、捉え方は自由なのである。そして、彼の作品には「終わり」というものが見えてこない。作品にとってなくてはならない「起承転結」の「結」が存在しないのである。例を挙げるならば、あるラブストーリーは、いろんな困難を乗り越えて、最後は結ばれるハッピーエンドであったり、あるサスペンスでは、謎を解き明かし、最後に犯人を捕まえる。しかし、ここで想像してみてほしい。作品の中の世界が想像の世界とするなら、読み手の生きる世界は現実世界となる。では、その現実世界で起こるすべての出来事に、先に述べたような綺麗な「起承転結」は存在するか？答えは、存在しない。それが現実である。作品の中に「起承転結」が存在する意味は、作品をおもしろくし、読み手に読んでもらうために使う、一つの手段である。所詮、つくりものなのである。ピンターの作品の終わり方がすっきりしない終わり方である理由は、読み手に、よりリアルさを感じてもらいたいからである。そして、その「結」は読み手自身が探すのである。言ってしまうと、マックスとセアラの関係がゲームなのか、本当の愛人なのかということに重要性はない。重要なのは、その二人のやりとりの中に、ピンターが隠しこんだ、「愛」についてのメッセージを見つけられるかどうかである。

物語は、一組の夫婦の日常である。夫リチャード (Richard) と妻セアラ (Sarah) は一見普通の夫婦である。しかし、彼等には普通の夫婦とは違う点がある。それはお互いが公認している愛人がいるということである。リチャードが仕事で家を空けている、朝から午後六時までの時間、その家はセアラと愛人マックス (Max) の

愛の巣と化するのである。そして、六時以降はリチャードが帰宅し、夫婦の愛の巣へと戻るのである。つまり、昼は愛人生活。夜は夫婦生活を送っているのである。しかし、その都合のいい日々も長くは続かない。ある日、セアラは、マックスに "I've played my last game." (65)¹ と告げられ、同じ日の夜に、リチャードにこう言われる。

The fact is this is my house. From today, I forbid you to entertain your lover on these premises. This applies to any time of the day. Is that understood. (71)

リチャードからも、愛人関係の終わりを宣告されるのである。しかし、ここから、リチャードとセアラが「夫婦」という関係から、マックスとセアラの「愛人」関係へと変わっていくのである。時間は夜であるにもかかわらず。夫婦という絆は、愛人という関係に負けてしまうのだろうか。

夫リチャード公認のセアラの愛人関係について。これを矛盾と言ってしまえば、何も始まらないかもしれないが、明らかに矛盾点である。ストーリーの初めのシーンの二人のやりとり。

RICHARD (amiably). Is your lover coming today?

SARAH. Mmnn.

RICHARD. What time?

SARAH. Three.

RICHARD. Will you be going out...or staying in?

SARAH. Oh...I think we'll stay in.

RICHARD. I thought you wanted to go to that exhibition.

SARAH. I did, yes...but I think I'd prefer to stay in with him today.

RICHARD. Mmn-hmmn. Well, I must be off. (43)

普通の夫婦が、日常の会話の中に、「愛人」という言葉を、存在を、認識し合っているのである。そこには、嫉妬という感情も存在しなければ、「何時に来るの？」などと、妻の愛人のことを、まるで友達であるかのように考えているのである。他にも、リチャードがセアラにその日の愛人との1日を尋ねるシーンの "What about your afternoon? Pleasant afternoon?" (45) のようなセリフは、普通の夫婦の日常には相容れない言葉である。この夫婦間で認められた愛人関係は、この作品の矛盾に溢れた世界の核となっていると言ってもいいだろう。こうして初めに設定された、夫婦公認愛人関係という矛盾によって、ストーリーは更なる矛盾を生み出していくのである。

さらに、リチャードのセリフ。

Does it ever occur to you that while you're spending the afternoon being unfaithful to me I'm sitting at a desk going through balance sheets and graphs?" (47)

これは、妻の愛人を認めているだけで矛盾であるにもかかわらず、客観的に見れば、ただの変態のようにも思えるセリフである。しかし、これにはもっと特別な意味があるのではないかと私は考えている。男が持つ独特のものが。これについては、後半部分で答えと共に論じていく。

逆に、セアラがリチャードに、"Do you ever think about me at all...when you're with her?" (52) と訊ねるシーンでは、セアラの仕返しのようにも思えるが、やはりリチャードの方が強い立場のような気がする。それは、この「愛人といるときに、思い出すか」という質問に対し、それぞれの答えに微妙な違いがあるからである。セアラの答えは、「リチャードを思い出すことは、刺激的である」と、答えているのに対し、リチャードは「セアラを思い出すことは、

楽しいよ」と答えている。ここではっきりするのは、セアラが背徳感を感じているのに対し、リチャードは余暇として愛人と過ごしているということである。この差は大きく、二人がお互いに「愛人関係」を認めながらも、その「愛人」という意義の捉え方の違いが如実に表れている。

リチャードの愛人について、彼はこう答える。

But I haven't got a mistress. I'm very well acquainted with a whore, but I haven't got a mistress. There's a world of difference." (49)

愛人か売春婦かなどという問題ではなく、どちらも背徳関係であると言うことに変わりはないのに、このリチャードのセリフには矛盾・疑問を抱く。これも上で述べたリチャードの余裕から来るものなだろう。

あるリチャードとセアラのやりとり。

Frankness at all costs. Essential to a healthy marriage.
Don't you agree?
Of course. (50)

ここには大きな矛盾が現れている。健全な結婚生活と言いながら、二人にはお互いに愛人がいる。私は、この矛盾が *The Lover* を読み解くキーポイントになると考えている。この点にも後程論じていく。

愛人を求める理由として、リチャードとセアラの考え方の違いが矛盾を生んでいる。

I wasn't liking for your double, was I? ... All I wanted was ... how shall I put it ... someone who could express and engender lust with all lust's cunning. Nothing more." (51)

リチャードはこのように語っている。それに対して、セアラはリ

チャードに、"Why did you look at all?" (51) と自分のことを棚に上げて、リチャードを責める。この二人の発言は、道徳的観点から見ると明らかに矛盾した考えである。しかし、この二人の考えは「男」と「女」の心理をよく表している。男は、性欲が強く、本命の女性をキープしつつ、性欲のための女性も欲しいという哀れな生き物である。一方、女は、自分が一番でないと気がすまない存在であり、嫉妬心が強いものである。こういった考え方の違いも矛盾を生むのである。

『恋人』は、リチャードとマックスを一人二役で同じ男性が演じている。それに加え、あと別人格のマックスも同じ男性が演じているのである。この配役の理由は一体どこにあるのだろうか？なぜこんなにも分かりづらい設定にしたのだろうか？最初に、リチャードが公認している愛人マックスが家にやってきたとき、セアラはまるで娼婦のような行動を取り、紳士的なマックスを誘惑する。しかし、この後、セアラが煙草を吸いに移動し、それについてきたマックスが別人になるのである。エロティックなマックスに声をかけられたセアラは、さっきの娼婦のような態度から一転して、冷たくあしらうのである。そして、この冷たい態度に逆上したマックスから、逃げ出すと、その何者かわからないマックスがまた別人となり、公園の管理人のマックスになるのである。この優しく真面目なマックスはセアラに対してとても優しく、セアラもこのマックスに好意を抱き、誘惑する。しかしながら、このマックスはそういった誘惑には惑わされない真面目な男であったため、セアラは愛想をつかせ、帰ろうとしたとき、管理人のマックスは別人に変身する。この暴力的なマックスは危険な男で、セアラを襲おうとする。そして、結局彼女は襲われたようなのだが、それが拒んでいたのか、受け入れていたのか、がどちらかということがあやふやになっているのである。

ここで何が起きたのかを語ることが読み手の楽しみであるとも言えるが、この真実に霧がかかっている状態が、またストーリーを複雑なものとしている。これまで挙げた、紳士的なマックス、エロティックなマックス、優しく真面目なマックス、暴力的なマックスの四人。読み手は、この四人のマックスの性格のどれかには必ず当てはまるのではないだろうか。ピンター劇において、登場人物は、その作品のためだけに存在している感が強いため、登場人物の性格付けも、必要最低限のものに限られている。しかし、このマックスらにおいては、感情という概念が色濃く押し出されている。唯一、感情移入できる点であるかもしれない。

ここで一つ注目してほしいことは、セアラに受け入れられたのは元の、紳士的なマックスであるということである。エロティックなマックスは、もちろん下心だけであり、価値も無い。優しく真面目なマックスを、人間としてはいいのだが、火付きが悪い。暴力的なマックスは、自己中心的。女性に受け入れられる男性像は、紳士的であることが重要なのである。もしくは、女性に「愛人」として受け入れられる男性像は…。

元の愛人・紳士的なマックスに戻ると、このマックスの様子はどうもおかしい。なぜかいつもは話題に出さない、夫リチャードについて話し始めるのである。そして、セアラに愛人関係を終わりにしようとして切り出す。なぜこのタイミングなのだろう？しかも、理由が子どもたちと妻のためだという。そう思うのであれば、関係を始める前からわかっているはずである。不意に襲われる、安息の終了。こういったタイミングの矛盾も『恋人』だけでなく、他のピンター劇にも溢れている。しかも、その愛人関係を終わらせることについての返事をセアラはしていないまま、そのシーンは終わってしまうのである。このすっきりしないシーンの区切り方も、ピンター独特

のものである。

ラストのリチャードとセアラの会話は、まさしく矛盾の世界がフル回転していて、私たちの思考を掻き乱してくる。初めは、普段どおり、日常会話をしたり、軽く愛人について触れたりしている。しかし、だんだん話は深くなり、ついに、リチャードはセアラと愛人マックスの不貞な関係を終わらせるように宣告する。これは『恋人』において、大きな矛盾の一つである。なぜなら、この愛人関係を認めていたのはリチャード自身なのだから。自分が認めておいて、自分がやめろという、とんだエゴイストである。これにもリチャードの考えがあると推測するが、それについては後ほど論じる。

そして、最大の矛盾として挙げられるのは、やはり、終幕でリチャードがマックスに変わる場面だろう。リチャードがドラムを叩くうちに、なんとマックスになるのである。そして、「煙草の火をくれ」や「君は罠にはまったんだよ」などと、以前マックスがサラに言った言葉を投げかけてくるのである。もうここまでくると、真実というものが何なのか全く分からなくなる。そして、リチャードが本当に存在していたのか？とすら思ってしまう。このシーンはきっと、見る人によって十人十色の結末の捉え方をするだろう。ピンターは、矛盾した物語にすることで、真実をあやふやにし、観る者に考えさせる作品にしたかったのである。

第二章 恋人と愛人の共存意義

これまで、『恋人』の矛盾・疑問点について考察してきた。ここからは、この作品が持つ真実・本質を紐解いていこう。

『恋人』には、日常的ではあるが、なぜそれが作品の中で取り上げられるのかがわかりづらいものがある。一つは、植木バサミであ

る。セアラが言う "Will the shears be ready this morning?" (55)¹ のセリフにのみ登場する。この植木バサミは、物語の進展になんら関わりの無い存在である。しかし、この一言が頭から離れない。ここに一つの暗喩が感じられる。それは、ハサミが持つ、「切る・断つ」という意味が、二人の未来を連想させてしょうがないのである。その通り、結果としてリチャードとセアラは離れることになってしまう。もう一つ似た意味で、ブラインドである。"That blind hasn't been put up properly." (45) とリチャードが言うと、"Yes, it is a bit crooked, isn't it?" (45) とセアラが答えるのである。普通に見れば、ただの日常会話である。しかし、屈折した愛人関係をもっている二人であるからこそ、その裏に意味が見えてくる。二人の関係がゆがんでいるという意味が。お互いがその事実を自覚している場面であると、捉えられる。

『恋人』の序盤、セアラが "It's a cold supper. Do you mind?" (47) と、リチャードに聞くと、"Not in the least." (47) と、気にするそぶりもなく答えていた。しかし、物語の後半、リチャードが "What's for dinner?" (69) と、セアラに訊ねると、"I haven't thought." (69) と答える。そのとき、リチャードは先ほどの態度とは違い、いらだちながら、こう言い放つ。

That's rather unfortunate. I'm hungry.

Slight pause.

You hardly expect me to embark on dinner after a day spent sifting matters of high finance in the City.

She laughs.

One could even suggest you were falling down on your wifely duties. (70)

以前は、晩御飯の用意ができていなくても優しくかったリチャード

が、セアラに対して厳しい言葉を吐きかける。これは二人の関係が壊れ始めたことを意味している。リチャードとセアラの関係、絶妙なバランスを保っていた夫婦と愛人の両立が、崩れたのである。

『恋人』にはもう一人、登場人物がいる。ミルク売りのジョンである。おそらく、ジョンの存在は『恋人』の裏の謎である。ジョンの存在にも、前述した植木バサミやゆがんだブラインドのように、意味があるのではないか。ピンター劇の特徴に当てはめるならば、「侵入者」である。しかし彼は、セアラに「ミルクは結構よ。」と軽くあしらわれてしまうのである。侵入未遂である。セリフもたった6回のみである。だが、ここにも隠された意味を感じる。セアラにとって、夫リチャードと愛人マックス以外の男はただの男である、いくら愛人がいるからといって、男なら誰でもいいというわけではないという、セアラのプライドともいうべき、信念が感じられる。だからこそ、終始冷淡な態度でジョンに接したのである。

リチャードがセアラの愛人関係を認めている理由は、夫としての優越感を味わうためであると考察する。そのことを裏付けるシーンとして、69頁のリチャードのセリフが挙げられる。

Great pride, to walk with you as my wife on my arm. To see you smile, laugh, walk, talk, bend, be still. To hear your command of contemporary phraseology, your delicate use of the very latest idiomatic expression, so subtly employed. Yes. To feel the envy of others, their attempts to gain favour with you, by fair means or foul,

your austere grace confounding them. And to know you are my wife. It's a source of a profound satisfaction to me.

(69)

このセリフはまさにリチャードの、いや、世の男性全般の優越感を

物語っている。やはり男は、誰からも賞賛される女性と付き合いたいものである。そして、他の男からの羨望の眼差しが何よりも快感なのである。そう、リチャードがセアラの愛人関係を認めている理由は、この快感にあるのである。53頁のリチャードがセアラと自宅の窓から夜景を見ながら、"Your poor lover has never seen the night from this window, has he?" (53) というセリフがある。このシーンで、リチャードは明らかに優越感に浸っている。愛人という、自分よりも下に位置する存在をつくることで、優越感を味わっているのである。先ほど述べた、セアラに、「愛人との情事中に私〔リチャード〕のことを思い出すか？」と聞く理由は、男の屈折した優越感によるものなのである。

しかしながら、この優越感も長くは続かなかったのである。それは、夫よりも、その夫より下の位置に位置するはずの愛人の方を、セアラが愛してしまっていることに気がついたからである。そのことに焦り始めたリチャードは、自分が認めたはずの愛人関係を、自分から、セアラにやめるように宣告したのである。つまり、これは矛盾ではなく、夫の嫉妬、エゴである。いわゆる自業自得である。「夫は愛人より優位」という位置づけは覆されたのである。真実は「愛人は夫より優位」なのである。

物語の最後、リチャードがマックスへと変貌していくシーンで、彼がセアラにこう語りかける。"You lovely whole." (71)。その後、二人はくっついたまま動くことなく幕が下りる。

『リチャードの「可愛い娼婦め」』という幕切れのせりふは、現実の時間の中で妻を娼婦と呼んでいるのか、ゲームの中に対する言葉なのか。虚構化されきってしまった夫婦の関係（すなわち、夫婦の現実時間の中に侵入しこれを全面的に支配する虚構の世界）を出現せしめるこの作品の結末において、リチャードの最後のせりふは計

算しつくされた不気味な両義性を保ったまま、芝居は終わる。』²

このように、最後のセリフは、あらゆる意味を持ったものである。その「娼婦」の言葉の先には、妻としてのセアラがいるのか、それとも、娼婦としてのセアラがいるのか。その真実は誰にも明かされることはない。その後、二人はどのような道を選ぶのか。夫婦の絆はもうほどけてしまったのか。愛人と見つけた、真実の愛に走るのか。全ては闇の中である。この何通りもの結末が想像できることが、ピンター劇を観る楽しみでもあるのである。

ひとつ、ここで理解しておいてもらいたいことがある。それは、「愛人」が成立する条件である。「愛人」は、愛している相手に、正式な「恋人」（例えば、妻、夫など）がいてこそ成立するということである。だからこそ、「恋人」を越えるとき、「恋人」より愛されたとき、「恋人」を奪ったとき、「愛人」の意味はなくなるのである。目標を目指して成立していた「愛人」関係が、目標に達したとき、不成立になるという、矛盾の連鎖。全ては矛盾と矛盾が重なり合って成り立っているのである。その中でも、「愛」という概念ほど矛盾で創られたものはない。毎日毎時毎分毎秒変化してゆく。「恋人」の存在がないと成り立たない「愛人」が、「恋人」の存在を越えてしまうと「愛人」でなくなる矛盾。ピンターが表現している、矛盾という樹海の森に、生まれながらに迷い込んだ我々人間は、その中で答えの無いそれぞれの愛を探し続け、真実の「愛」を見つけるために生きていくのである。

結論

『恋人』が伝えるメッセージは、人間が持つ理性の「愛」と本能の「愛」の共存である。私たちが生きる、道徳的思考に縛られた世

界では、「愛」とは、二人の人間が、お互いを信じ、結婚し、夫婦となり、他者に気移りすることなく、お互いを愛し合い、永遠を誓っていくことが、理性に基づいた愛、真実の愛とされている。これこそが、一般的に言う、「健全な結婚生活」("Healthy marriage", 50)¹である。しかし、そこに疑問符を投げかけたのがこの『恋人』である。ここで登場するのが、「恋人」に対する存在である「愛人」である。「愛人」は、「恋人」とは、逆の存在であり、自分の欲望のために存在する。いわば、本能のおもむくままの「愛」である。夫婦に限らず、恋人、全ての人に当てはまる彼氏彼女、年齢に関係なく、全ての恋愛において、公に付き合う正式な恋人、夫婦（ここでは、正式な相手のことを総じて「恋人」とする。）とは、真実の愛とは言いながらも、全てを包み隠さずに付き合っていけることはないのである。お互いを大切に想い過ぎるからこそ、「失いたくない」「自分の良い所だけを見せ続けていたい」というような思いが、自分を繕ってしまう。そして、相手に足りないものを求めるということもできない。相手に不満を言いたくないから。これらが全てをさらけ出せない原因である。一方、「愛人」という存在は、「恋人」の前では見せることのできない面を見せることができたり、自分の求めているものをストレートにぶつけることができるのである。たとえば、小さな頃、よくこんな経験をしなかっただろうか？どこにでもある普通の四角い白い消しゴムと色や香りがついたものや、ケーキや食べ物の形をした可愛い消しゴム。ただの四角い白い消しゴムは、使い勝手がよく、毎日どんどん磨り減っていく。一方、色や香りがある可愛い消しゴムは大事にして使うことはない。これを人に当てはめると、前者のただの白い消しゴムは「愛人」であり、後者の可愛い消しゴムは「恋人」である。自分が一番大切なものは、傷ひとつつかないように大事に大事に扱うだろう。しかし、使い勝手

がよく、何度も取替えのきくものは気楽に扱うだろう。そうするうちに、大切なものは、大事にし過ぎて、一緒にいること、使う機会が少なくなる。逆に、気楽にいつも使っていたものは、だんだん愛着が沸いてきて、無くてはならない存在になるのである。「恋人」を大事にしすぎて、どこかに大切にしまったまま、忘れてしまい、「愛人」は気楽に始まったはずなのに、気付いたときにはもう虜になり、逃れられなくなっているのである。この、一見矛盾した「恋人」と「愛人」の関係であるが、これこそが人間の真実の愛の答えなのではないのだろうか。私たち、人間にとって、「愛」とは、恋人でもなく、夫婦でもなく、「愛人」のために存在するものなのかもしれない…。そのことに、リチャードとセアラは気付いていて、お互いが愛人をもつことで、真実の愛を模索していたのだろう。これこそが二人の考えていた「健全な結婚生活」であると考えられる。理性に基づく愛と、本能の赴くままの愛。二つの矛盾した調和こそが、真実の愛なのである。しかし、リチャードとセアラがそうであったように、その調和も永遠ではないということも、また真実である…。

注

第一章

- 1 Harold Pinter, *The Collection & The Lover* (東京、英潮社、1989年) p.65 (以下の引用は全てこのテキストによる。)

第二章

- 1 Harold Pinter, *The Collection & The Lover* (東京、英潮社、1989年) p.55 (以下の引用は全てこのテキストによる。)
- 2 土岐省三著『現代演劇 no.1』(東京、英潮社新社、1979年) p. 44

結論

- 1 Harold Pinter, *The Collection & The Lover* (東京、英潮社、1989年) p.50

参考書目**I. 第1次資料**

Harold Pinter, *The Collection & The Lover* 東京、英潮社、1989年
ハロルド・ピンター著 喜志哲雄・小田島雄志・沼澤治治訳『ハロルド・
ピンター全集』東京、新潮社、1977年

II. 第2次資料

喜志哲雄著『英文学ハンドブッカー「作家と作品」＜第2期 No.60＞ピ
ンター』東京、研究社、1972年
土岐省三著『現代演劇 no.1』東京、英潮社新社、1979年